

2月の定例研究会は、内海孝先生からご講話をいただきました。

「澁澤榮一の青年時代」

内海孝（原三溪市民研究会顧問・東京外国語大学教授）

2012年2月11日（土）14:00～16:00



澁澤の出身地である血洗島周
辺の農業構成から説き起こす
内海孝先生

会員から

2月研究会は、内海孝先生の講話「澁澤榮一の青年時代」でした。4月予定の見学ツアー「原善三郎生家（埼玉県児玉郡神川町）の天神山庭園と渋沢栄一のふるさと深谷」の事前勉強会も兼ねました。内海孝先生が何回も行った現地調査に基づいた、具体的で興味深い講話に時間の経つのも忘れませんでした。

「青年時代」に焦点を当てたのは、91年間（天保～昭和初期）の長き生涯の中で、金融財政改革に参加し、多くの企業や学校の設立とその育成、社会事業や国際親善に尽力して、近代日本の産業経済の礎を築いた「澁澤榮一」の原点は、既にその青年時代（幕末から明治の激動期）に形成されたと見るからです。

利根川流域の血洗島（深谷）の豪農に生まれた榮一が、家業の藍玉の製造・販売を手伝って養った商いの目、代官からの上納金申し付けという旧来のしきたりと社会構造への疑問、「高崎城乗っ取り計画」攘夷運動の断念と「家」を捨てる決断、京都一橋家への出仕と勘定組頭としての働き、そして27歳のときパリ万博、フランス巡察で目の当たりにした近代的な政治・経済・文化に対する開眼。これら青年期の強烈な体験一つ一つが、激動する新しい社会に対応できる柔軟な姿勢、変化の先を読む目、新時代の要請に応えうる資質を培い、その後の「日本の実業界のリーダー澁澤榮一」の原点になったと考えられます。

榮一が24歳の時、家業を継がず「家を突き出た」その時こそ、将に「近代人、自由人誕生の瞬間」だったのです。

澁澤榮一の時代に重なる原善三郎・原富太郎（三溪翁）の生き方や原点を考えると、多くの共通点を見い出せた講話でもありました。

（小林一彦）